

『徐福渡来はやはり^{ほんとう}真実だった』

たかみやしんじ

令和5年（2023年）12月、NHK・BS放送で「FRONTIERS」～その先に見える世界～という番組が始まった。NHKによれば、新番組「フロンティア」は科学、宇宙、歴史、アートなど、見たことのない驚きの新世界をディープにお伝えする新感覚の知的探求ドキュメンタリーと謳う。語りの担当には俳優のオダギリジョーと女優の蒼井優が起用された。

その第1回が12月6日に放映された。題して「日本人とは何者なのか」。オダギリジョーは次のように語る。“今、日本人のルーツに関する常識が覆ろうとしている。カギを握るのは最先端の「古代DNA解析」。数万年前の骨から大量の情報を読み出す驚きの技術だ。浮かび上がってきたのは「最初の日本人」の意外な姿。アフリカから最初に東アジアにやってきた人類との密接なつながり。世界にも類をみないユニークな文化誕生のヒミツ。そして、今の日本人のDNAを決定づける「謎の集団」との混血の証拠。従来の常識を超えて、私たち日本人の「祖先観」が覆る”。

今回の番組の主張の結論は、「現代の日本人のDNA」＝「古墳時代の日本人のDNA」ということだと思われるのだが、突然そのようなことを主張されても何がなにやら解りかねるということになるのであろう。そこで、先ずは序章においてこの番組の概要をお伝えすると共にその内容を一緒に確認しておきたいと考える。既にこの番組を視聴された方々には冗長になると思われるが暫し我慢いただきたい。

そして、本稿ではこの最先端の技術から導かれたDNA解析結果をもとにして、遂に辿り着いた「日本人のルーツ」＝徐福渡来論の可能性を再認識すべきではないかと語りかけたいと思っているところである。

序章 日本人のDNAとは何か

タイ国パッタラン地方の密林深くに暮らしている「マニ族」の一種族がいる。30数人の小さな集団であるが、他との交流は余りないようであり、独特の生活文化をキープして種族を守っている。女性の仕事は食料の「イモ」を探してみなに供すること、男性の仕事は「狩り」をすること。やはり、みなに食料を供することになるのであろう。番組では「吹き矢」で鳥を射止める場面が流され

たが、この「狩り」ができるようにならないと一人前とは認めてもらえないという。

「マニ族」のマニはタイ語では奴隷とか野蛮を意味するとされる。「マニ族」は狩猟採集社会で、バナナの葉でつくられた屋根を持つ竹の一時的小屋を建てる。多くの種類の動物を狩り、おおくの種類の果物や野菜を消費する。また、彼らは多くの異なる種類の薬草に精通している。

最初のグループはヤラとナラティワートのティティワングサ山脈に住み、二番目のグループはパッターン、トラン、サトゥーンのバンタット山脈に住んでいる。総人口は約300人とされている。(Wikipedia)

この「マニ族」、4万年前から2万年前にアフリカから流れてきて東南アジア一帯に定着し、所謂「ホアビニアン文化」を築いた人たちの流れを汲んでいるという。そして、約8000年前の「ホアビニアン」の人骨をDNA解析したところ、古代東南アジア系に近いことが確認されたというのである。そして又、それは日本の縄文人のそれと近いというのである。また、ベトナム系や南中国系、中国（北京）系やモンゴル系とは異なっているというのである。

これらのことから、「ホアビニアン文化」を築いた集団の一部の人たちが、中国大陸の海岸沿いを北上して日本列島に行き着いたのではないかと推論されている。そしてまた、彼らが北上していった理由は農耕民族に追われたのではないかとされている。日本列島に辿り着いた集団は縄文人としてDNAを残し、農耕民族が流入した東南アジア地域からはDNAが失われていった。しかしながら、外部との接触を絶ち続けた「マニ族」が奇跡的にホアビニアンのDNAを受け継いでいると考えられているのである。

縄文時代はおおよそ16,000年前から3,000年前頃と時代区分される。旧石器時代の後にあたり、旧石器時代と縄文時代の違いは土器と弓矢の使用、定住化の始まりと竪穴建物の普及、環状集落や貝塚の形成、植物栽培の始まりなどが挙げられる。(Wikipedia)

鹿児島県の徳之島にウンブキ水中洞窟が発見された。底では海に繋がっているこの水中洞窟から9,000年前の多数の縄文土器が発掘されたのである。

20,000年前の世界は氷期であった。そして、氷河期の終わりには氷が溶けだし100m以上の海面上昇があったとされ多くの低地が海に埋没していった。そして、日本列島は16,000年前から6,000年前にかけて次第に大陸から孤立していった。世界では農耕文化など技術や文化の交流があり、次第に各地域に文明圏が成立していくのであるが、日本においては縄文時代という独特の時代が醸成されていく。

ウンブキ水中洞窟遺跡は、縄文土器が他から流入するような地形でないことなどから、海面上昇により水没してしまった縄文遺跡と考えられているのである。

青森県の「三内丸山遺跡」は、縄文中期頃から中期末葉（約5900年～4200年前）の大規模集落跡である。八甲田山から続く緩やかな丘陵にあり、標高は約20m、遺跡は約40ヘクタールの広大な範囲に広がっている。集落には住居、墓、捨て場、貯蔵穴などが配置されているが、通常の見られる竪穴建物や高床倉庫のほかに、大型竪穴建物が10棟以上、約780軒にも及ぶ建物跡、祭祀用に使われたのではない

かとされている大型掘立柱建物が存在したと考えられている。また、他の遺跡に比べて土偶の出土が多く、そしてそれは薄い板状であり板状土偶と呼ばれるが、縄文後期から晩期の他の立体土偶とは大きく異なっている。(Wikipedia)

北海道礼文島。稚内市から西に約60kmに在り、東西約8km、南北約26kmの島である。礼文島には13か所の縄文遺跡があるとされている。それらの一つに船泊遺跡がある。1998年の大規模調査によりある一人の女性の遺骨が発掘された。驚くことに、貝で作ったブレスレットなどを身にまとった遺骨はほぼ全身が完全な形で残っていたというのだ。

2019年、最新技術によって骨に残ったDNAが詳しく調べられた。そして、「船泊23号」と名付けられたこの女性は、肌の色は濃く、毛は縮れ、目は茶色、血液型はA型など分析され復元されたのである。番組では、復元されたこの「船泊23号」が船泊遺跡など礼文島の遺跡を解説した。

20,000年前の日本列島は、北海道北部と九州北西部で大陸と繋がっていたのではないかと考えられている。そして、日本列島は16,000年前から6,000年前にかけての海面上昇により次第に大陸から孤立していった。

鹿児島県のウンブキ水中洞窟遺跡はそうした地球規模の変動の中で陸上の集落が次第に海に埋もれて行った。青森県の「三内丸山遺跡」は、現在標高20mの丘陵にある。所謂「縄文の海進」によって陸地が次第に海に埋もれてゆき、周辺の海岸に居住していた縄文人はその住処を追われた。追われた先はより高い所、より高い所と移動を余儀なくされたことだろう。そして、次第に大きな集落が形成されていったのではないかと考えられる。北海道礼文島は20,000年前には島ではなかった。「縄文の海進」が次第に島を形成していったものと考えられる。そして、海辺を追われた縄文人が礼文（島）に辿り着いた。礼文島に多くの縄文遺跡が残るのはそのような事情によるのであろう。

さて、こうして大陸から孤立していった日本列島は縄文時代として固有の文化を形成していく。そして、弥生時代に至り渡来人との混血が進み現代の日本人のDNAが形成されてきたものと考えられていた。これが、従来から唱えられていた日本人の起源の二重構造説というものである。これに対し、驚くことに番組では日本人の起源の三重構造説を紹介しているのだ。本章では、これらのことを順次記述していくことにしたいと思う。

日本人の起源の二重構造説が発表される前には、置換説（最初に日本に渡来した先住民がいて、後にそれと異なる渡来がありその末裔が現在の日本人とするもの）、混血説（最初に日本に渡来した先住民がいて、後にそれと異なる渡来があり、先住民と混血したのが現在の日本人とするもの）、変形説（最初の渡来人が時間的に変化して現在の日本人になったとするもの）などが唱えられていた。

二重構造説（二重構造モデル）は、故埴原和郎東京大学名誉教授（1927-2004）によって1991年に発表された。埴原教授の専門分野の頭骨の分析から提唱されたものであるが、ごく簡潔に説明すると以下のごとくである。

“東南アジア起源の縄文人という基層集団の上に、弥生時代以降、北東アジア起源の渡来系集団が覆いかぶさるように分布して混血することにより、現代日本人が形成された。渡来系集団は北部九州及び山口県地方を中心として日本列島に拡散したので、混血の程度によって、アイヌ、本土人、琉球人の三集団の違いが生じた”。

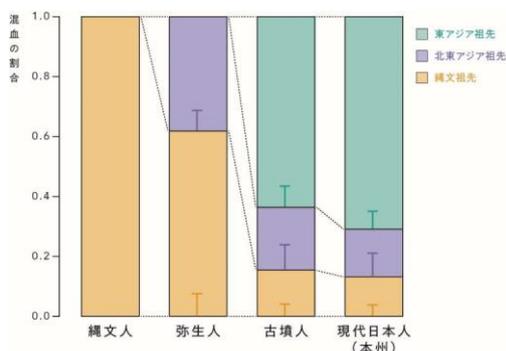
この二重構造モデルを発展させて、「日本人の三重構造モデル」を提唱したのが、アイルランドのダブリン大学、金沢大学、鳥取大学などの国際共同研究グループだ。2021年9月のニュース・リリースにより、日本列島の遺跡から出土した縄文人・弥生人・古墳時代人のパレオゲノミクス解析を行い、現代における日本人集団のゲノムが三つの祖先集団で構成されていることを世界で初めて明らかにした。

この研究では、日本列島の遺跡出土人骨から12個体（縄文人9・古墳人3）のゲノムデータを取得、これらに加え既報の縄文人や弥生人のゲノムデータと大陸における遺跡出土人骨のゲノムデータを用いて大規模な集団パレオゲノミクス解析を行った。その結果、20,000年前から15,000年前に大陸から分かれた縄文人が縄文早期頃までは小さな集団を維持してきたこと、そして、稲作文化がもたらされたとされる弥生時代には北東アジアを祖先集団とする人々の流入がみられ、縄文人に由来する祖先に加え弥生人には第二の祖先成分が受け継がれていることが分かった。しかしながら、古墳人にはこれらに加え東アジアに起源を持つ第三の成分が存在しており、大陸からの人の移動と混血が伴ったことが分かった。そして、この三つの祖先は現代日本人のゲノム配列にも受け継がれているというのだ。（左図は広報から転載）

*ゲノム…遺伝子をはじめとする遺伝情報 のすべてを意味する言葉。

*パレオゲノミクス…古代の人や生物の遺物からDNAを取り出し遺伝情報などを分析する学問分野。古代ゲノム学とも。

NHKの番組では、この三重構造説を紹介すると共に、古墳人の解明が日本古代史の解明につながるものと考えられるので重要視され



● 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷

していききたい。本章においては、まずは縄文人の渡来の実際について推論を進めてみたい。

中国の史書に書かれた古代の「倭」について、『邪馬台国をとらえなおす』（大塚初重）では次のように記述している。“「倭」について初めて書かれた中国の正史は、『論衡』（王充：27年～90年頃）と『漢書』（班固：32年～92年）地理志とされている。『論衡』には、「周」の時、天下太平にして、倭人來りて暢草を献ず」などと記されている。暢草は薬草で、酒に浸して服用されたものようである。『論衡』においては倭を中国の呉越地方（長江の下流域）の南付近と認識していたらしい。『論衡』にある周は、中国の歴史時代において夏（前21世紀～前17世紀）、商（前17世紀～前12世紀）について、紀元前12世紀から紀元前256年にあったとされる”。

さて、『論衡』に記述されている「倭人」とは古代日本人のことであったのだろうか。古代日本人が呉越地方の南付近に勢力を構えていたとはとても考えられない。また、日本から朝貢するのに中国南部産とされる暢草を貢物として選ぶということも考えにくいのではないだろうか。となると、ここに記述される「倭人」とは何者かということが論じられなくてはならないのである。

序章において記述したように、「ホアビニアン文化」を築いた集団の一部の人たちが、中国大陸の海岸沿いを北上して日本列島に行き着いたのではないかと推論されている。そしてまた、彼らが北上していった理由は農耕民族に追われたのではないかとされている。日本列島に辿り着いた集団は縄文人としてDNAを残し、農耕民族が流入した東南アジア地域からはDNAが失われていった。この「ホアビニアン文化」を築いた集団には「マニ族」も含まれる。彼らは多くの異なる種類の薬草に精通していたのであった。

故大塚初重氏が指摘されているように、倭は中国の呉越地方の南付近と認識されていた。そして、倭は中国語では「小さい人」を意味するというのである。実は、「マニ族」の人たちは小柄であり、髪は縮れていて肌の色は濃いのだという。

「ホアビニアン文化」を築いた集団の一部の人たちが中国大陸の海岸沿いを北上して、まずは中国の呉越地方の南付近にたどり着いた。そして、その一部の人

るべきと結んでいる。

第1章 縄文人渡来の復元

序章においては日本人の起源について、祖先集団の遺伝子情報をもとにした解析結果としての二重構造説、三重構造説を参照、記述してきたのであるが、本章以降においては祖先集団の渡来の実際を復元して記述

たちがそこに着地して中国王朝に朝貢するほどの勢力を築いた。彼らは菓草に長じていたので貢物として暢草を献じた。この人たちを中国王朝では、倭（小さな夷）と称したのである。

ではそれはいつ頃のことだったのであろうか。周の時代は紀元前12世紀から紀元前256年にあったとされている。そして、朝貢したのは周の天下太平の時だったというから、周の時代でも初期の頃と考えられる。

20,000年から15,000年前に少数単位の狩猟民族が中国沿岸部を北上して、辿り着いた先で混血しながら、また、北上していった。そして、まだ大陸と繋がっていた日本（列島）へと進んで行き縄文人となっていったのである。

ところで、縄文人のルーツの人々は上記に記述した中国大陸沿岸部を北上していった人々だけだったのであろうか。「ホアビニアン文化」を築いた集団の一部は、追われて東南アジアの島々にも拡散していったのではないかと思われるのである。そして、その一部の人々が丸木舟に乗って島伝いに北上して、沖縄にそして日本（列島）に進んでいったのではないかと考えられるのである。

『魏志倭人伝』に記述される「侏儒國」は小人の国である。人の長^{たけ}3、4尺で、女王国から4,000余里離れたところにあると記述される。沖縄諸島には現在でも明らかに小柄な人々が存在する。「侏儒國」は沖縄諸島のことなのだろうか。既述のように「マニ族」の人たちは小柄であり、髪は縮れていて肌の色は濃いのだという。

『魏志倭人伝』にはまた、次のような記述がある。“卑弥呼は鬼道に優れていた。卑弥呼には夫がいなかったが、男弟がいて、卑弥呼を助けて国を治めていた”。これらのことの意味するのは、卑弥呼は鬼道（呪術）に優れており国民の信頼を得ていた。そして、政治や軍事は弟が差配していたものと理解されるのである。

卑弥呼の原像は、琉球の「^{せいふあうたき}斎場御嶽」を管掌する「^{きこえ おおきみ}聞得大君」に求められる。「聞得大君」は琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を靈的に守護するものとされていた。この「聞得大君」、国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）と言われている。こうした琉球の信仰については、琉球王朝以前の村落時代（3世紀～12世紀）においても御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神（姉妹）が司り、その信託によって根人（兄弟）が政治を行ったとされているのである。

では、このようなことが沖縄の民から発生して長年にわたって伝承されてきたものなのだろうか。そうではないだろう。これほどのインパクトのある風習であるならば、それはそれなりの震源地というものが求められてしかるべきではないかと思われるのである。

インドネシアのライジュア島。魔女伝説など数々の数奇な風習が伝えられている。それらの一つに、姉妹がその兄弟を靈的に守護するという信仰があり、兄弟が危険な場所に旅立つ時にはその姉妹は弟の無事を祈って、自ら織った「イカット」という布を兄弟に贈るといふ。(Wikipedia)

インドネシアの島々から沖縄の島々へは島から島へ連なっていたと言われており、そのような風習・宗教的な習が伝わってきたとしてもありえないことではないと考えられる。そして、最初の日本への着地点は地勢的に考えても沖縄地区以外には考えられないだろう。

驚くことに、「古事記」にそれに類することが記述されているのである。オオナムチがスサノオの試練を受ける段。蛇の室屋で寝るようスサノオに命じられたオオナムチにスセリヒメがそっと近寄り、領巾ひれ～薄く細長い布で、難を逃れられる呪力があると信じられていた～を渡し、そっと囁いた。“これは蛇の領巾といって呪力があるの。蛇があなたを咬もうとしたら三度振ってくださいな” …この夜オオナムチはぐっすり眠ることができたのだった。

もう一つ、沖縄には「毛遊び (もうあしび)」という風習が近年まであったと言われている。夕刻から深夜にかけて若い男女が野原や海辺に集まって飲食を共にし、歌舞を中心として交流した集会をいう。毛遊びは両親をはじめとする親族や共同体公認のものであり、開かれた交際の中から人間関係を築き、将来の伴侶を定めるという風習が近年まで伝統として受け継がれてきた。このような風習は沖縄のみならず、近代以前までは日本各地にみられ、古くは「歌垣 (かがい、うたがき)」と呼ばれる男女交際場があり、恋歌の掛け合いをしながら互いの気持ちを確かめ合ったと言われている。(Wikipedia)

ここに登場する「歌垣」であるが、日本のほかに中国南部からベトナム、インドシナ半島、フィリピンやインドネシアにも存在する。現代の中国南部および東南アジア北部でみられる「歌垣」を概観すると、祝祭日 (種まき前の春先など) の夜に10代半ばから20代の男女が集会し、衆人環視のもとに男性と女性が1対1で互いに求愛歌を掛け合いながら恋愛関係になるといった類型が多い。

(Wikipedia)

因みに、「万葉集」の巻9に高橋虫麻呂が詠んだ筑波山の「歌垣」の歌がある。
“驚の住む 筑波の山の 裳羽もほきつ服津の その津の上に 率あどもひて 娘子壮士の
行き集ひ かがふかがひに 人妻に 我も交らむ 我が妻に 人も言問へ この山を
うしはく神の 昔より 禁めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事も答むな”。

加藤正春氏の論文(「沖縄の別れ遊び儀礼の考察」)がNETに掲載されている。その序文を紹介させていただく。“かつての沖縄では、若者の死の直後に若者仲間が墓に赴き、歌舞音曲をともなった伽をする習俗がみられた。ワカリアソビー (別れ遊び) などと呼ばれたこの儀礼は、死んだ若者の毛遊び仲間が夜ごとに墓

前に集い、そこで一時を遊び過ごすものであった。儀礼は1週間ほど続けられたが、いくつかの報告では墓内から棺箱を出したり、その蓋を開け死者を座らせて行うこともあったとされている。また、墓前の仮小屋に短く織った手拭いを飾って集う例も報告されている”。

この事例の震源地もライジュア島なのだろう。既述のようにライジュア島には魔女伝説がある。この島には2人の魔女がいて島民はその子孫なのだという。2人の魔女は様々なところを移動しては男たちを誘惑して多くの子供を産んだという。この魔女伝説と結びつくかのように、島には「アオ・パケ・プア」と呼ばれる未婚女性によって産まれた子供たちが多く存在する。島ではこうした伝説や現象をタブー視せず、「神から授かった子」として尊重しているのだという。また、ライジュア島には、「タオラオ」という死者を祀る祭礼が毎年6月に行われる。この「タオラオ」では、魔女（マラガー）に対し生贄を捧げ、住民が織った独特の模様の「イカット」を飾り死者をあの世に送るのだという。(W i k i p e d i a)

以上で見てきたように、インドネシアのライジュア島に代表される東南アジアの人々の特異な習俗の伝播は、古代の彼らの仲間の一部が丸木舟に乗って島伝いに北上し、先ずは沖縄に到達したこと、そして更に、日本（列島）を北上していったのではないかということが容易に推察されるのである。そしてまた、その伝播の時期は弥生時代や古墳時代の外国からの渡来を遡る時期、即ち、縄文時代でなければならぬだろうと考えられるのである。

縄文時代は1万年を超える長い時間に多くの文化が醸成されたのであるが、黒曜石や翡翠が採掘地以外の広域の遺跡で発掘されていることなど、各地域間の交流が行われていたことも指摘されているところである。これらの遠隔地との交流において丸木舟が大いに活躍したであろうことも想像に難くないところである。

第2章 弥生人渡来の復元

さて本章では、弥生人の渡来について記述していきたい。三重構造説によれば、この弥生人の渡来は北東アジア人だというのである。北東アジア人が弥生時代を形成したというのであれば、その渡来の時期は縄文晩期頃から弥生時代中頃までということになるだろうか。具体的には紀元前1000年から紀元前後くらいの渡来であろうと考えられる。また、北東アジアとは地理的にどのような範囲なのかということであるが、日本の歴史学・考古学では朝鮮・満州・モンゴル東部・ロシアの極東が一部で用いられている範囲と言われているのでそのように理解して大きくは外してないだろう。

(1) 騎馬民族征服王朝説の再評価

山川日本史小辞典改訂新版によれば、「騎馬民族説」は次のように記述されている。“第2次大戦後、日本古代国家の成立過程を説明するために、江上波夫によって提唱された学説。これによれば、3世紀末から4世紀初めにかけて、東北アジア系の騎馬民族である扶余族が朝鮮半島から九州に渡来して征服し、第1次建国を行って成立したのが崇神王朝であるとする。この王朝は5世紀初めに九州から畿内に移動し、倭人を征服して第2次建国を行い、応神王朝が成立したという。天皇の諡号や畿内の後期古墳から馬具が集中的に現れることなどをその証拠とする。古墳文化の連続性など考古学的な点で疑問も多いが日本における国家の形成を外的要因から捉えようとした点で画期的である”。

ここで注意すべき点は、江上は元寇のように大陸騎馬民族が一気に九州または日本を征服していると見ているわけではなく、長い年月朝鮮半島を支配し定住した民族が、情勢の変化により逼塞したことにより、長時間かけて日本列島を征服支配したとしているのであり、大陸騎馬民族が一気呵成に日本列島を征服したことを前提としてそれを否定するのは江上への批判として適切ではない。そして、江上は騎馬民族が農耕民族を征服支配した場合には、徐々に農耕民族に同化するものとしている。それが故に江上は、大和朝廷を騎馬民族によって成立したと見ながら、日本の民族の形成は弥生時代にまで遡ると捉えているとされるのである。(Wikipedia)

騎馬民族征服王朝説は多角的に批判されて、それらの批判に抗しきれずに現状では一部の研究者によってのみ支持されているようである。しかしながら、この度の三

重構造説による北東アジア人の渡来による弥生時代の形成説は、江上が唱えた騎馬民族説に共通するところが多いことに気付かされないだろうか。確かに古墳時代までを説明することは難しいのであろうが、弥生時代の渡来の基層集団を説明するには大きくは外していないと思われるのである。

令和5年(2023年)に全国邪馬台国連絡協議会が投稿論文集「みんなの邪馬台国」を発刊した。その中の小論「相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった」で論述したところであるが、モンゴルの「オボー祭り」に発するブフ(相撲)、弓射、競馬は、朝鮮半島経由で日本に伝播したのだった。

古気候学によれば、約5,000年前から2,500年前には世界的な寒冷期があり、その後、2,500年前から現在までは温暖期にあるという。そして、有史時代の気候としては、古代寒冷期(紀元前1,000年~紀元前200年)、古代温暖期(紀元前200年~200年)、中世寒冷期(古墳寒冷期。200年~700年)が区分されている。(Wikipedia)

この古代(5,000年前から2,500年前)の世界的な寒冷期に北東アジアでは何が起こっていたのであろうか。より温暖な地域への移動が起こっていたであろうことは想像に難くない。即ち、北東アジアから中国への進出であり、

朝鮮半島への進出である。匈奴の中国王朝との確執、扶余族の朝鮮半島への進出などが代表例としてあげられるであろう。

小論「相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった」で記述したところであるが、平成16年(2004年)に高句麗遺跡群の一つとして世界遺産登録された「安岳3号墳」に描かれている壁画は、当時の高句麗において相撲のような格闘技(ブフ)が行われていたことを示している。高句麗は紀元前37年から668年に中国東北部の南部から朝鮮半島北中部に存在した。この高句麗は扶余族が建てたとされている。扶余族はモンゴルの一部族で紀元前二世紀末満州平原に進み、ツングース諸族を征服して扶余国を立てたとされている。そして、この相撲のような格闘技(ブフ)が隠岐の島経由で古代出雲に伝播したらしいのである。

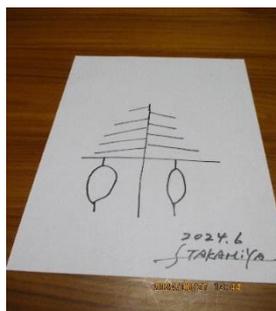
(2) 銅鐸と神社

稲吉角田遺跡(鳥取県米子市)から出土した土器に描かれている絵が当時の祭祀など様々なことを語りかける。稲吉角田遺跡は弥生時代中期=紀元前1世紀頃の遺跡と言われる。土器に描かれているのは、集落の中央と思われる場所に銅鐸と思われるものが吊るされた樹木と祭殿。そして、少し離れたところに梯子が架けられた高層神殿が描かれている。また、周辺には自然界を代表して鹿が描かれ、集落に向かって船が漕がれて、太陽が射し輝いているといった光景である。

鹿を狩猟していた集落があった。そこに外国人を乗せた船が着いた。太陽を意識しているので稲作をもたらしたのであろう。銅鐸を吊るした樹木と祭殿では五穀豊穰を祈願した。高層神殿は尊い人を祀ったものであろうか。

この銅鐸を吊るした樹木については、吊るしたのは鏡ではないかなど異論もあり決着がついていない。そこで他の文献などを参照して、樹木に吊るした物が何なのかを追求してみたい。(下の写真はイメージ図)

「古事記」の天岩屋戸の段に、岩屋に隠れた天照大神を神々が知恵を絞って外に誘い出す場面がある。神事に用いる榊という常緑樹を天の香久山まで行って掘り出してきた。この榊の上枝に勾玉の飾りを吊るし、中枝には鏡をかけ、下枝には白と青の幣飾りを垂らした。幣とは神に捧げる供え物のことだが幣飾りは麻や木綿などの布をたくさん束ねて飾ったものである。そして、天^{あめの}児^こ屋^や命^{のみこと}は祝詞を声高に唱えだした。出番を待っていた天宇受売命^{あめのうすめのみこと}は天の香久山のつる草をたすきにかけ、正木のかつらで髪を飾り、手に天の香久山の笹の葉を持って、岩屋戸の前に伏せた桶をととん、ととんと足拍子面白く踊りだした。次第に心が浮かれていき、しまいには神がかりして狂喜乱舞の有様となる…。



「古事記」では、榊に吊るしたのは勾玉と鏡と幣飾りと言っており、銅鐸が出てこないのである。しかしながら、「古語拾遺」(齋部広成編纂、807年)には、天の岩戸の祭事において天^{あめのうずめのみこと}細女命が銚に鐸をつけて踊るという記述がある。また、小野神社(長野県塩尻市、祭神:建御名方命)や諏訪大社(長野県諏訪市他、祭神:建御名方命他)に伝わる鉄鐸(さなぎ鈴)がある。両社に共通するのは、矢張り、銚に鉄鐸をつけてガシャンガシャンと打ち鳴らして祭事を行うことである。

このような記述や伝承から、銚に鐸をつけて音を鳴らすことで神の依り代として鐸が使われていたことが推量される。そもそも、日本の銅鐸は中国大陸を起源とする鈴が朝鮮半島から日本に伝わり、独自の発展をしたというのが定説である。従って、初期の段階では小型の鐸を銚に付けて音を鳴らしていたものが、次第に大型化し、樹木などに吊るして打ち鳴らした。そして、さらに大型化して、見る物化していったと考えられるのである。

これらのことから、稲吉角田遺跡の土器に描かれた樹木に吊るされた物は銅鐸であったと思われる。この土器の絵に描かれた樹木に吊るされた態様は、上部の線状の絵模様は吊るし紐、下部の線状の絵模様は舌を揺らす紐と思われるのである。しかしながら、着目されるべきは「古事記」に記述される上記の“幣飾り”の記述である。麻や木綿などの布をたくさん束ねて飾ったものとされる。これは正しくライジュア島の“イカット”と同じことを意味しているのではないだろうか。上記の小野神社の鉄鐸には無数の麻幣^{あさぬさ}がふさふさと結び付けられ、7年目ごとに行われる御柱祭に一かけずつ麻幣を結ぶ習わしであるという。

ということは、出雲地方を中心とする銅鐸文化もそれ以前には“幣飾り”の文化があったということになるのであろう。そこに銅鐸文化の渡来があり、銅鐸文化の比重が高まっていったということだろう。では、九州地区はどうだったのだろうか。こちらにおいては、銅鐸文化がそれほどの広がりをみせていないようなのである。こちらにおいては、どうも“幣飾り”の文化に“鏡の文化”が渡来してきたということのようなのである。弥生時代の銅鏡の発掘は九州地区が多いのである。

縄文時代における信仰は、自然崇拝(種族安全祈願)、生命尊厳(種族繁栄祈願)というものであったものと考えられるが、そこに大陸からの文化が渡来して弥生時代に入るとこれらに加えて、五穀豊穰と首長崇拝ということが行われるようになっていったのではないかと考えられる。そして、信仰(祭事)を行う場所も巨石、巨木や神山を仰ぐような位置に祭殿や神殿を構えるようになっていった。

そして、祭具として銅鐸が重要な位置を占めるようになっていった。銅鐸文化は出雲地方を発祥の地として、日本海よりの地域、関東地方、吉備、畿内などへと全国的に広がっていったのである。

以降において出雲勢力の全国に広がってゆく模様を記述していきたい。

(3) 出雲勢力の全国展開

どういう訳か記紀には銅鐸文化の記述がないのである。しかしながら、スサノオに照準をあててみるとスサノオそしてその末裔が全国展開してゆく模様が推論できるのである。

まずは大国主の国造り・国譲り譚である。国譲りに登場するタケミナカタ、大国主が八十神に追われて逃げた木ノ国のこと、事代主が国譲りに服従した話が神話として描かれている。しかしながら、これらの話は大国主の時代の話だと時代が合わない。これをスサノオの時代とし、スサノオの国造りだったことことに置き換えることで時代の整合性がとれてくるのである。

スサノオは幾多の乱暴狼藉を記述され、そして、高天原を追われ出雲の地に降りる。そこにおいて、大山祇系の足名椎神と手名椎神に請われてヤマタノオロチを退治した後、その娘クシナダヒメを娶り出雲の地に宮を構えた。そして、大山祇族と提携して全国進出に乗り出していくのである。

西は筑紫に向かい、宗像海神族と提携、遠賀川界限を席捲することに成功する。これを担ったのはオオヤマツミの娘神大市姫との息子大年尊だった。

東は、タケミナカタを建てて越から科野諏訪に進出した。因みに、長野県諏訪市には足長神社・手長神社が対で鎮座する。祭神はアシナヅチ・テナヅチ。タケミナカタに随従する神と伝わる。そして、出雲族は諏訪を拠点にして碓氷峠を越えて北関東に進出していった。このタケミナカタについて「古事記」では国譲り譚において、タケミカヅチと最後の戦いを展開し、タケミナカタが敗れ諏訪の海に蟄居させられるのだが、そのようなことが史実でないことはその後の諏訪軍神の活躍をみれば明らかなことであろう。ただ、碓氷峠を挟んで鹿島神宮（祭神タケミカヅチ）、香取神宮（祭神フツヌシ）と対峙していたことを記述した可能性はある。なお、「先代旧事本紀」においてタケミナカタは大国主と高志ヌノカワ姫との子とされるのだが、国譲りが大国主の時代のことではないことを心得ておかななくてはならない。

二つめは五十猛の活躍譚である。「日本書紀」では、五十猛神はスサノオと共に出雲国斐伊川に降りた後、筑紫から大八洲に樹木の種を植え青山に被われる国にしたと記述される。また、紀伊の国に祀られるとされており、和歌山市に鎮座する伊太祁曾神社の祭神として広く知られている。この五十猛神、妹神2柱と全国に植樹したと記述されており、武力による全国の征討というニュアンスで記述されない。

大国主の国造りでは、大国主は八十神に追われて木ノ国に逃げたという風に記述されていたのだった。

三つめがニギハヤヒの降臨である。「日本書紀」の記述では、神武東征に先立ち天照大神から十種神宝を授かり、天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）に降

臨し後に大和に移ったとされている。そして「先代旧事本紀」によれば、大和の豪族ナガスネヒコの妹を娶り、一族の長として当地を支配した。後にイワレヒコ（後の神武天皇）が大和にやってくると服従しないナガスネヒコを殺害し、イワレヒコに支配地を差し出すのだった。因みに、ナガスネヒコとは長髓彦（＝長脛＝足長＝アシナヅチ系）でオオヤマツミを類推させるのである。

さてニギハヤヒが授かった十種神宝であるが、これには八握剣（＝草薙剣）と沖津鏡、辺津鏡などがある。八握剣を天照大神が授けられるはずがない。授けたのはスサノオであろう。そして、鏡は宗像大社の沖津宮、辺津宮を想起させる。即ち、ニギハヤヒはスサノオの命を受けて、八握剣を携えて宗像海神族の漕ぐ船に乗って河内国を目指した。そして、遂には大和をも支配下に治めるのであった。

では、ニギハヤヒとは誰であったのか。これこそスサノオが娶ったオオヤマツミの娘神大市姫との子、大年尊ということになる。大年尊は遠賀川を出立、瀬戸内海を経て河内国白肩津に至る。ここでナガスネヒコ軍と戦いになり苦戦、男之水門（和歌山市）に陣を構える。ここ（和歌山市）は五十猛神が先行して開拓した地であり、ここを拠点にして遂にはナガスネヒコを撃破したのであろう。

大国主の国譲りで事代主があっさり国を差し出すのであるが、それはニギハヤヒがイワレヒコに支配地を差し出したことを記述しているのである。

（４）四隅突出型墳丘墓

銅鐸文化は、山陰を中心として北陸・北九州、吉備、畿内、関東など広く展開していった模様である。しかしながら、北東アジア人の渡来はこれに留まらず、次々と渡来は続いた。そして、弥生時代中期以降、山陰地区中心に吉備・北陸などに四隅突出型墳丘墓築造という特異な埋葬文化をもたらしたのである。

銅鐸或いは四隅突出型墳丘墓にしても山陰に発掘が多く、そのなかでもやはり出雲地方が中心ということになるだろうか。出雲といえば、荒神谷遺跡が著名である。1984年からの発掘調査で、銅剣358本・銅鐸6個・銅矛16本が出土している。銅鐸の製作時期は弥生時代前期末から中期中頃の間とされているので、紀元前3世紀から紀元前後ということになるだろう。一方、四隅突出型墳丘墓は弥生時代中期頃から紀元3世紀頃の築造とされている。このことは、同じ出雲で発祥したが銅鐸祭祀と四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼は、時間を経て順次移行していったことを示しているのである。別の言い方をすれば、銅鐸祭祀の集団の延長線上に四隅突出型墳丘墓の集団がないということかもしれないのである。

では、この四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼は誰が出雲にもたらしたのであろうか。考

古学の重鎮・故大塚初重氏は、積石塚が四隅突出型古墳の原形ではないかという説を唱えておられた。そして、その故地は朝鮮半島北部（高麗）と推定、高麗か

ら海を渡って出雲にやってきて四隅突出型古墳として発展し、北陸はじめ各地（長野県長野市大室・松本市里山辺・群馬県高崎市長瀬西・山梨県甲府市桜井横根など）に広まっていったのではないかとされているのである。しかしながら、同じ北東アジアの集団がもたらしたものであるならば、それは、北東アジア地域において埋葬儀礼に大きな変化があったことを示唆しているのではないだろうか。

出雲弥生の森博物館（島根県出雲市）には四隅突出型古墳（西谷3号墓）のジオラマが館内に展示されている。そして、ジオラマでは紀元2世紀頃築造されたと考えられる西谷3号墓に埋葬されたであろう王の葬儀の様子が再現されているのである。古墳上部中央に棺が埋葬される。そして、それを囲むように四本の大きな柱が建立されつつあるのである。

西谷3号墓では、大きな土壇の底に棺を置いた後、その上に4本の巨柱を用いた施設が建てられていた。又、棺の真上には朱のついた丸い石がご神体のように置かれていた。その上には200個にもものぼる土器が出土した。これらのことから、築造した古墳の上では、亡き王を埋葬した後4本柱の施設を建て、中央に置いた赤い丸石を敬いながら多くの参列者が飲み食いをしていたものと推論されているのである。

この西谷3号墓は実に多くのことを語りかけている。一つは出雲地方の王の墳墓であると分析されているように、首長の埋葬が行われたということである。そして、四隅突出型墳丘墓の上には大きな4本柱の痕跡があった。このことは、稲吉角田遺跡の土器絵から高層神殿であったことが容易に推量される。この高層神殿の下では、集まった多くの縁者（皇族、高官、近隣の首長など）により葬送の儀が行われた。

このようなことから四隅突出型墳丘墓は、首長の墳墓を造り、祭殿に祭神として首長を祀るという、いわゆる神社の発祥があるのではないかと考えられるのである。そして、それらが扶余族の習俗の流れを汲むものであるとすれば、原点はモンゴル地方の「オボー祭り」にある。とすれば、先述の高句麗の「安岳3号墳」の壁画が示すように、この葬送の儀においてブフ（相撲）などが行われていたのではないかとすることも容易に類推されるのである。

例えば、羽咋神社（石川県羽咋市）の例大祭で行われる唐戸山神事相撲がある。羽咋神社の祭神は垂仁天皇の皇子・磐衝別命いわつくわけのみこととされている。ご由緒によれば、祭神はこの地で仁政を敷き、近在の力の優れた人たちを招き相撲をとらせて武勇を養い、体を鍛えさせて民から尊敬されたという。その遺徳を偲んで、祭神の

命日に各地から力自慢の若者が唐戸山と呼ばれる相撲場に集まり神霊をお慰めしたのが神事相撲の始まりという。石川県羽咋市には、能登国一宮・気多大社が鎮座する。祭神は大己貴命^{おおなむじのみこと}である。即ち、界限は出雲系の地盤であった。そこに、垂仁天皇の皇子が派遣されてきた。このことの実関係は不詳であるが、神社のご由緒を認定するとすれば、中央に政変があり出雲系から崇神天皇系に政権の変動があった結果、この地方を治めるべく垂仁天皇の皇子が派遣されてきたということが考えられる。

この羽咋神社のご由緒は、「日本書紀」垂仁天皇紀の以下の記述に大きな関係性を見出すことができる。垂仁7年、大和に当麻蹶速という天下の力持ちがいることを知った垂仁天皇は、出雲国から野見宿禰を呼び寄せ拵力（すまい）をとらせる。結果、野見宿禰が当麻蹶速のあばら骨と腰骨を踏み砕いて勝利し、天皇は蹶速の土地を没収し野見宿禰に与え、仕えさせるのである。又、垂仁天皇の叔父・倭彦命が亡くなった時行われた殉死に心を痛めた天皇は、皇后・日葉酢媛の葬儀に際し別の方法はないか尋ねる。これに対し、野見宿禰が人馬の埴輪を作り殉死に替えることを提案、献上する。喜んだ天皇は野見宿禰を土師職に任命し、以降野見宿禰の後裔・土師氏が天皇の葬祭を司ることとなる。

この二人の戦いであるが、この戦いは単なる二人の力比べとか両陣営挙げての戦争とかでは割り切れない。後に土師氏が古墳造営や葬送儀礼に関わってくるからである。とすれば、この力比べは古墳造営競争ではなかったかと思われるのである。古墳を造るには巨石を運ぶ怪力が必要である。そして、それを加工する技術が必要である。怪力を相撲に擬して著わした。腰骨を踏み砕くとは石の加工を意味した。野見宿禰の野見とは「ノミ」を意味するという一説もある位である。

いかがであろうか。磐衝別命のお話との大いなる類似性にも気付かされないだろうか。そして、磐衝別命の墳墓と比定される古墳が羽咋神社境内に存在する。

もう一つ。角力取山古墳（すもうとりやまこふん）が岡山県総社市に残る。方墳で、築造年代は墳形から5世紀後半頃と推定されている。古墳名はかつて戦前には古墳の近くに土俵が据えられ、御崎神社のお祭りの時に奉納相撲が催されていたことによると言われる。残念ながら、現在はお祭りも絶え、土俵もなくなっているのだが…。

この御崎神社は岡山県総社市地頭片山に鎮座する。古より美實郷（かつての山手村三須村）の氏神にして地方最古の神社とされている。祭神はスサノオ、大国主命、少名彦名命の三柱である。そもそも総社市は備中国の国府所在地であり、古代吉備国の中心地として栄えた地域である。この地に、出雲系の神々が祀られていることから、古代に出雲からこの地に進出してきた人々がいたことを想像

させる。古来、出雲と吉備は密接な関係にあったのである。

第3章 古墳人渡来の復元

さて、いよいよ最終章である。この章では、東アジアに起源をもつ渡来人の復元に記述を進めていきたい。三重構造説によればそれは、古墳時代に全国に拡がっていったとされているのである。とするならば、それは東アジアに起源を持つ渡来があり、そして、古墳造営の全国展開とともに人の全国展開も同時にあったということになるのであろうか。

しかしながら、この三重構造説の分析結果が主張しているのは、“弥生人および古墳人がそれぞれ独自の祖先をもっているということではなく、縄文人の祖先と大陸の祖先が混血した状態であった”ということなのである。従って、必ずしも、縄文人→弥生人→古墳人という時系列で混血が進んでいったのではないということに注意が必要である。

(1) 奴国を構築した渡来人

稲作の日本への伝播については、朝鮮半島経由説（長江流域に起源がある稲作を伴った人類集団が、紀元前5～6世紀には呉・越を支え、北上し、朝鮮半島から日本に達したとする説など：Wikipedia）、江南説（中国の長江下流域から直接日本に伝播したとする説）が概ね支持されている。

本稿では、より具体的に考えてみたい。BC473年越王勾践によって滅ぼされた呉。この時、呉の王族・貴族・軍隊は持ち前の海運力を生かして北へ逃れた。そして、九州などへ流れつき、稲作など先進技術をもたらし、やがて「奴国」を築き上げる事となる。

「魏略」では、“帯方から女王国まで1万2千里。…自ら太伯の後と謂う”と記述される。ところがこの部分、「魏志倭人伝」では、“郡から女王国までは1万2千里。…古来使いが中国を詣でた時大夫と称した”と記述されている。つまり魏志倭人伝では、女王国（邪馬台国）は太伯の後の国ではないと訂正しているのである。では太伯の後の国とはどこの国になるのだろうか。中国或いは朝鮮海峡から着地しやすいのは北九州地区であるということは多くの認めることであろう。そして、「奴国」は「魏志倭人伝」に2万戸ありと記述される北九州地区に存在した大国であった。これらのことは、「奴国」こそが太伯の後の国であることを示しているのではないだろうか。

志賀海神社が福岡県福岡市志賀島に鎮座する。祭神はワタツミ三神。この志賀島から金印（「漢委奴国王印」）が出土した。この金印は、57年奴国王が後漢の光武帝に献じていただいたものだった。そもそも、中国の皇帝に献じるとい

え方は中国からの渡来人だからこそその発想であろう。このことから、奴国は渡来人の興した国であると考えられるのである

本稿の第1章において『論衡』について記述した。『論衡』においては“周の時天下太平にして倭人来りて暢草を献ず”と記述されているのであった。この倭人とは長江下流域の人たちであった。この倭人の末裔が、やがて稲作を帯同して日本に上陸したということだろう。中国の朝廷に献ずるということは先人たちの習わしでもあったのである。

しかしながら、この人たちは東アジアのDNAを持つ人たちではないかもしれない。どういふことなのか。実は、太伯の建てた国が呉であったとしても、また、越に追われた呉の人たちが北九州に流れ着いたとしても、DNAは長江下流域の人たちのものであり、東アジア系のDNAではないと三重構造説で分析されていると考えられるからである。

「奴国」を建てた人たちは持ち前の海運力をもって日本列島各地に進出していった。その軌跡は安曇とか志賀・四賀とかの地名に名残を残しているのだと言われており、実際に各地にその名称が残されている。しかしながら、それらは地名として残されてはおり実際に北九州から進出してきたことは史実として理解して外してはいないものと考えられるのであるが、東アジア系のDNAを持つ人たちではなかったのである。

(2) 邪馬台国畿内説の行方

「奴国論」の次に論じられなければならないのは「邪馬台国所在地論」である。何故なら、邪馬台国が初期ヤマト王朝に繋がっており、ヤマト王朝時代が古墳時代と重なっていると多くの古代歴史家に考えられているからである。一般的には、「邪馬台国所在地論」の主流をなすのは九州説と畿内説であるが、本項では邪馬台国畿内説が三重構造説には適合しないことを論述していきたい。

畿内説の主張の根幹をなすのは纏向遺跡の発掘であろう。纏向遺跡（奈良県桜井市）は弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡・複合遺跡である。遺跡の大きさは東西2キロ・南北1.5キロとされており、なんと後代の藤原京や平城京に匹敵する規模とされているのである。このサイズは書記の大和朝廷の存在を主張することに疑問を挟みにくいものがある。

また、界限には所謂「纏向型古墳」と称される初期の古墳が点在しており、やがて定型化した大型の「箸墓古墳」に繋がってゆく。この「纏向型古墳」の原型

が吉備で誕生し（例えば、倉敷市の楯築墳丘墓）、それに出雲の四隅突出型墳丘墓の貼り石やヤマトの埋葬文化が習合して、後に北九州の豪華な副葬品文化がやってきて前方後円墳が定型化したと考える向きもある。

そして、遺跡から発掘された土器は在地系のものだけでなく外から持ち込まれた土器が多いというのである。具体的には、東海系（49%）、山陰・北陸系（17%）、河内系（10%）、吉備系（7%）、関東系（5%）、近江系（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）である。

これらのことは、纏向遺跡と全国各地との関わりを強く示すものであり、纏向遺跡＝ヤマト王朝としてそれほど外してはいないだろう。それを裏付けるような記述が「日本書紀」にある。それは、崇神朝の記述である。“ハツクニシラスメラミコト”と称された第十代崇神天皇の宮は磯城瑞籬宮（桜井市金屋）、第十一代垂仁天皇の宮は纏向珠城宮（桜井市穴師）、第十二代景行天皇の宮が纏向日代宮（桜井市穴師）と、ヤマト朝廷発足時の都が三輪山や纏向界限に築かれていたことが記述されているのである。

しかしながら、それらのことは纏向遺跡＝ヤマト王朝＝古墳時代を示しているのではあるが、纏向遺跡＝邪馬台国と言っているのではないのである。このことを立証するためには、纏向遺跡と卑弥呼との関係を具体的に表わさなくてはならないのである。しかしながら、従来から論じられてきた畿内説の卑弥呼論からはその関係性について多くの研究者を説得できるものは著されていないのではないかと思われる。

更には、この度の三重構造説の発表によって、纏向遺跡の王朝を形成した人たちは黄河流域の人たちでなくてはならないのである。しかしながら、現在のところ、三重構造説の評価が途上であるということからか、そのような論調が発せられた形跡は余り見かけない。土器や遺物についても、九州由来或いは朝鮮半島由来のものが非常に少なく、また、魏志倭人伝に記載されている鉄器も僅かしか出土していないことから、この遺跡は大陸との交易が乏しかったと類推されている。遺跡は黄河流域からどんどん離れていってしまうのではないだろうか。

（3） 邪馬台国東遷説の可能性

大陸との関係、朝鮮半島との関係でいえば、矢張り邪馬台国九州説の方に説得力があろう。そこで、次に邪馬台国九州説並びに邪馬台国東遷説に論を進めて参りたい。

邪馬台国九州説の主張の根幹をなすのは伊都国（福岡県糸島市）であろう。魏志倭人伝では帯方郡の使者が常駐していたことや、交易の中心であったことが

記述されている。また、「一大率」という役所が設置され諸国を檢察していたというのであるから、極めて重要な位置づけの国なのである。

邪馬台国九州説は、魏志倭人伝が伊都国など北九州諸国から南方向に水行何日か行ったところに邪馬台国があると記述していることから、北九州説、南九州説など多くの説が主張されている。

しかしながら、三重構造説の観点から論述するとすれば、邪馬台国の所在地は九州のどこに在ってもあまり関係がないのである。問題は黄河流域の人たちがどのようにして九州に来たか。その規模はいかほどのものであり、どのようにして当該地域に勢力を築いたか。そして、その勢力がどのようにしてヤマト王朝を築いたかということなのである。

先ずは、北九州の勢力がどのようにしてヤマト王朝を築いたかということであるが、このことについては一般に言われている「邪馬台国東遷説」が代表的な説明であろう。即ち、魏志倭人伝で記述される九州で成立した王朝（邪馬台国）が畿内に移動してヤマト王朝を築いたとする説である。記紀で記述される「神武東征」や「応神東征」などとも呼応すると考えられている。

この説は三重構造説の観点から考えて成立するものであろうか。肝心なのは畿内に移動した勢力が黄河流域のDNAを持った人たちであったのかどうかということである。邪馬台国成立時にはそのような気配がない。魏志倭人伝に記述されるのは、邪馬台国の人たちや界限の人たちは、“倭人の分身は中国江南の文化に通じるもの”があるとか、“物の有無については中国海南島と同じである”とかの記述であり、中国黄河流域とは関係なさそうである。では、その後黄河流域のDNAを運んだ人たちが居たのであろうか。

実は居たのである。それが、魏（帯方郡）から派遣された張政らの一団である。狗奴国に苦戦していた邪馬台国を鼓舞、支援するために派遣された一団であったろうと考えられる。惜しまれるのは、この一団の規模が記述されていないことである。しかしながら、張政らが敗走するようなことがあつてはならない訳であり、相応の規模で派遣されたことが想像される。また、この人たちは魏の流れの人たちである可能性が高く、黄河流域のDNAを運んできた。そして、数年もの間滞在したのであるから、三重構造説の可能性がないとはされない。

では、張政らの一団は邪馬台国の東遷まで同行したのかというと、そうではなかったと考えられる。卑弥呼が死んで台与が立つと、張政らの一団は激を残して帰還して行ってしまったのである。

纏向遺跡を中心として構築されたと考えられる古墳文化が全国に波及していった。その古墳文化の波及において黄河流域のDNAが全国に波及していった

という風に考えられる。これが三重構造説の唱えていることだろう。しかしながら、東遷した邪馬台国の人たちは黄河流域のDNAを持っていなかった可能性が大である。このことは、邪馬台国東遷説を否定するものではないが、この人たちがヤマト王朝＝纏向遺跡の構築の主流にはなりえなかったことを示しているということは理解しないと成らないだろう。

(4) 徐福伝説の可能性

三重構造説の唱えているところをもう一度復唱してみたい。それは次のようなことであった。即ち、“黄河流域の人たちが日本列島に渡来して、相応の勢力を築き、やがてヤマト王朝を建て、そして古墳文化を全国に展開していった”と。そして、その古墳文化は纏向遺跡をその始まりとしていたのであった。そして、それは紀元3世紀頃のことではないかと考えられているのである。しかしながら、その頃において、俄かに海外から渡来していきなり大きな勢力を築かれるというようなことが起こりうるだろうか。

例えば、秦氏の渡来である。「日本書紀」では応神天皇14年(283年)に百濟より128梟の人を率いて帰化したと記述される弓月君を秦氏の祖とする。平安時代初期(815年)に編纂された「新撰姓氏録」によれば“秦氏は秦始皇帝の末裔”という記載がある。しかしながら、その真実性には疑問が呈されており、秦氏が権威を高めるために王朝の名を借りたというのが定説となっている。(Wikipedia))

そもそも、外国から渡来(帰化)していきなり大きな勢力になること自体が可能性の低いことなのであり、渡来人が日本へ着地し、勢力を張るには数百年の年月を見なくてはならないだろう。

中国では、殷王朝を滅亡させた周の武王が「周王朝」を建てたのが前1046年(牧野の戦い)のことであった。鎬京(現西安市)に都を置いた。その後王朝内の覇権争いから前770年に洛邑(現洛陽市)に遷都する。そしてその後、秦始皇帝により前221年に全国統一が果たされるのであるが、この前770年に遷都されるまでを西周、それから前221年までを東周という。西周においては、一族や功臣を王領各地に派遣して封土として治めさせる封建制を敷いていたのだが、西周の崩壊はこの封建制の崩壊をも意味し、東周時代は春秋戦国時代となっていくのであった。

この封建制の崩壊に伴い、諸侯国は次世代の頂点を目指して弱い国に戦争を仕掛け、人・財産・土地を略奪していった。こうした諸侯のなかでも強大な権力を有した諸侯を“覇者”と称した。当時の政治の中心部は中原(黄河中・下流域)

とされていたのであるが、最初の中原の覇者が斉国の16代桓公とされている。斉国の創始者は周の武王の国師であった軍師の太公望・呂尚であった（姜斉）。後の政変により田氏が前386年諸侯として認められ、以降は田斉とされる。しかしながら、秦始皇帝軍に攻められ前221年に滅亡する。これにより、秦は中華を統一し秦朝を確立する。

さて、徐福である。秦の方士で、斉国の琅邪郡（現山東省臨沂市周辺）の出身と伝わる。「史記」巻118「淮南衝山列伝」によると、秦の始皇帝に東方の三神山に長生不老の靈薬があると具申し、始皇帝の命を受け、3,000人の童男童女と百工を従え、財宝と財産、五穀の種を持って東方に船出したものの三神山には至らず、平原広沢を得て王となり秦には戻らなかったと記述されている。また、「史記」巻6「始皇帝本紀」に登場する徐氏は、始皇帝に不死の薬を献上すると持ち掛けて援助を受けたものの、その後始皇帝が現地に巡行したところ、実際に出港していなかった。そのため、改めて出立を命じたものの、その帰路で始皇帝が崩御したという記述になっている。（Wikipedia）

※方士 … 紀元前3世紀から5世紀の中国で占い・気功・錬丹術・静坐などの方術で不老長寿をなしとげようとした修行者。道教の成立で道士とも。

前述のように、渡来人が日本に着地して勢力を張るには数百年の年月を要するものと考えられるのである。とすれば、三重構造説の観点から、中国の周の時代から秦の時代の黄河流域からの渡来というのが焦点の一つになるだろう。本稿の最後に徐福伝説の可能性について考察してみたい。

（イ）黄河流域のDNA

三重構造説が唱えている東アジア地区のDNAは黄河流域を中心とするものとしてよいのだろう。その中でも、東周時代（前770～前221年）から始まる春秋戦国時代に群雄割拠していた国々から戦乱を逃れて移動する人々が多数発生したことは想像に難くない。とりわけ注目したいのは斉国である。国土は黄河河口、山東半島をカバーする領域であり古来港が発達していた。今で言うボートピープルもここいら辺から出航したのかもしれない。しかしながら、先に記述したように断続的な少数の渡来では大きな勢力を築くに至らないのではないかということなのである。

（ロ）古代琉球と斉国

NETに「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究 - 新石器時代から漢代まで」（研究代表者：熊本大学 木下尚子教授）という研究論文要旨

が掲載されている。それによると、“中原で消費されたタカラガイは台湾を含む中国東南沿岸地域で採取され、山東半島を通過して黄河流域にもたらされた可能性が高い。中国において、商・周代併行期、台湾や琉球列島で玉加工品やこれに関わる製品が流行する。これはタカラガイの採取を目的として移動した人々の動きを反映する可能性がある”というのである。

これらの指摘は、端的に言うなら古代斉国と古代琉球とで文物の交流があったということなのである。「物」はタカラガイ、では「文」は何だったのだろうか。それは、その頃斉国で芽生えた、後の天師道ということになる。古代琉球において「ノロ」の呪術、「ニライカナイ」思想などに具現化されていったのではないかと考えられるのである。

(ハ) 卑弥呼の鬼道

魏志倭人伝では、卑弥呼の「鬼道」と記述されているのである。また、“衆を惑わす”とも。この卑弥呼の「鬼道」は古代琉球から九州に伝播したものなのか。或いは、徐福の渡来が真実であり、徐福一行が九州はじめ日本各地に伝えたものなのか。このことの判断は、埋葬文化との関連を考慮すべき事柄ではないかと思料するものである。琉球では古墳の発掘が殆どみられない。それは、琉球において豪族が勢力を築くに値する経済力のある社会に至っていなかったということだろう。その理由は、秦の時代に至るやタカラガイは廃れて金属銭の時代となっていたことが指摘されるであろう。琉球において豪族が勢力を築く基盤が失われて行ってしまったのである。

では、卑弥呼に「鬼道」をもたらしたのは誰か。「鬼道」のもとが天師道ということであるなら、それは斉国からの伝播でなくてはならない。いよいよ、徐福の渡来がクローズアップされてくるのであるがいかがであろうか。

(ニ) 疫病対策

秦の時代において方士が非常に重用されていた。徐福もそうした方士の一人だった。特に錬丹術は、服用すると不老不死の仙人になれる霊薬をつくる。秦始皇帝や漢の武帝が子の霊薬を服用していたと言われる。その背景には疫病の流行があったことは想像に難くない。

漢の時代（後漢：25年～220年）、日本では“倭国大乱”と言われる時代があった。その原因は、大陸との交流が盛んになったことによる疫病の流入があり、疫病が蔓延したことであろうと考えられる。この時、名を挙げたのが卑弥呼だった。魏志倭人伝によれば「鬼道」に事え、大いに“衆を惑わす”のだった。卑弥呼の時代に女性の呪術者は大勢いたものと思われる。しかしながら、多くの国々を連合して女王に共立されるには国々を率いるに足る理由がなくてはなら

ない。そこで、卑弥呼の「鬼道」＝徐福の「方術」とされなくてはならないのだが、徐福の出航が前220年頃であり、時代の差が大である。この期間を徐福の末裔が勢力を築いた年月とみることは可能であるが、もっと積極的な理由付けが可能なのである。

(ホ) 徐福出航の目的（地）

秦始皇帝陵（中国、陝西省）の地下宮殿には水銀を用いて表現された黄河や長江が機械仕掛けで流れる様に設計されていたというのである。そして、それが築造されたのは前246年から前208年と言われている。これに使われる大量の水銀はどこから調達しようとしていたのだろうか。ここに徐福出航の目的を伺い知ることができるのである。船に百工を同乗させたというのは錬丹術の技術者のことを言うのであろう。しかしながら、どうしても理解が難しいのは童男、童女を多数同乗させたことである。これには、徐福出航の裏の事情が潜んでいそうであるが、ここではそこに深入りしないでおくこととする。

徐福は水銀を求めて出航したのだった。それは東の海、蓬萊の地ということなのだが、漠然と東に向かって漕ぎだしたのであろうか。そういうことではないだろう。表の目的がはっきりとしていて皇帝の命を背負っての出航、裏の目的も確固たるものがあつたと思われる。その出航の目指すところが漠然としていたなどとは考えにくいのである。では、徐福一行はどこを目指したのか。ずばり、それは九州であつた。

古来、琉球からの人の移動先は九州であつた。また、古琉球と九州とは海産物を中心とした交易関係があつた。だから、九州の情報は古琉球経由で斉国に伝わっていた可能性大なりと考えられるのである。

さて、そろそろ本稿を終了しなくてはならない。これ以降の徐福一行の活躍は所謂「徐福伝説」が一つの示唆を与えてくれている。また、本欄の小論「卑弥呼は初代斎宮だった」において辰砂論を展開し、徐福渡来と水銀との関係を結んだのでご参照いただきたい。

了